

二〇〇二年度総合文化研究所活動報告

公開講演会

共催 ポルトガル語専攻
総合文化研究所

「ポルトガル文学におけるフェミニズム」

四月二十九日

アグスティーナ・ベッサ・ルイス（ポルトガルの女性文学者）

主催 総合文化研究所

「ドイツ統一後の舞台芸術―多様化する舞台芸術の現在（いま）はいかに語り得るのか」

一〇月二十九日

ハンス・ティース・レーマン（フランクフルト大学教授）

主催 総合文化研究所

東南アジア課程タイ文学研究所

「タイ文学の現場とその周辺」

一月五日

ブライブダ・ユン（タイ作家）

主催 総合文化研究所

「戦争か平和か―「難死の思想」から見る九・一一以降の世界」

一月二十六日

小田実

連続公開講演会

主催 総合文化研究所

後援 国際言語文化振興財団

「作家の（こ）と（は）シリース」

荻野アンナ 一月一日―三日

津島佑子「外国の文学とは？」 一月一九日

多和田葉子「Ektophone―母国語の外へ出る」 三月五日

特別講演会

主催 大学院地域文化研究所

後援 総合文化研究所

「表象文化とグローバルゼーション」

一月二三日

奥泉光

特別シンポジウム

主催 大学院地域文化研究所

後援 総合文化研究所

「表象文化とグローバルゼーション／越境のアポリア―反グローバルイズムの可能性」

一月二〇日

パネリスト 沼野充義（東京大学）、小谷真里（批評家）、野谷文昭（立教大学）、亀山

郁夫

司会 吉本秀之

編集後記

総合文化研究誌第六号が出来上がりました。今年度は欧米第一課程の担当ということ、英米とドイツとの接点を探りました。けれども、地理的にも言語学的にも文化的にも、とりたてて緊密な共通項があるとはいえない欧米第一課程は、本学の特長な改革構造の結果であり、そのなかで本誌の特集を組むときの共通テーマの設定に悩みました。本学の九五年改革は閉鎖性の排除という点で効果もあつたのですが、欧米第一課程のように必然性のはっきりしない合体は、今日でもその有機的な意味あいを見出せていません。

特集のテーマは「演じる―表象の諸相」になりました。本学のカリキュラムでも表象文化の共同授業を精力的に推進しているドイツ演劇の谷川さんが柱になって、この企画は可能になりました。ドイツ・アメリカの演劇の今日が明らかになる原稿のみならず、アジアを代表してシンガポールの演劇に詳しく、また作家として組織者として、さらに行政の面でも活躍している、シンガポール在住のロバート・ヨーさんから寄稿いただけたのはありがたいことでした。欧米に閉じこもることなく特集の開放性を目指すことができました。

表紙絵はジャン・ゴードンさんが所蔵している、ロダンのリトグラフ（*Le Suspendue*（宙ぶらりん）（一九〇二年制作）です。ロダンの生涯にわたる舞踊、ダンス・パフォーマンスへの強い関心から生まれた作品です。写真撮影はゴードンさんの友人で、昨秋他界されたロバート・クッシュナーさんによります。裏表紙はナバホの砂絵です。固定してはいない宙ぶらりん状態と同じように、砂絵は決して固定したり保存してはいけないことになっています。儀式が終わったら、風に流して吹き消さねばなりません。砂絵が今、このような形で残っているのは、民族学の研究資料として、また観光資源としての思惑がうまく先住民のなかで納得されたからなのでしょう。ヨーロッパの文化とアメリカ先住民の文化を代表する二つの作品は、特集「演じる」にあざわしいものになりました。私たちは常に宙ぶらりん状態にありながら、人生という「プロセス」を歩んでいます。演じています。

学年度の前半は谷川さんが海外研修のため私が編集を担当しましたが、本号がこのように充実したものになったのは、緻密な相互協力によつてです。そしてもちろん教務補佐の岸井紀子さん、福岡由仁郎さん、栗山陽子さんの協力と努力がなければ、研究誌は形にもならなかつたでしょう。皆様、ありがとうございます。した。

（荒このみ）